

|         |  |
|---------|--|
| 氏名(本籍)  | 桐谷正信(東京都)  |
| 学位の種類   | 博士(教育学)  |
| 学位記番号   | 博乙第2511号   |
| 学位授与年月日 | 平成22年5月31日                                       |
| 学位授与の要件 | 学位規則第4条第2項該当                                     |
| 審査研究科   | 人間総合科学研究科  |
| 学位論文題目  | アメリカにおける多文化的歴史カリキュラムに関する研究<br>- 「新しい社会史」を手がかりに - |
| 主査      | 筑波大学教授 博士(理学) 井田仁康                               |
| 副査      | 筑波大学教授 博士(教育学) 田中統治                              |
| 副査      | 筑波大学教授 博士(教育学) 甲斐雄一郎                             |
| 副査      | 筑波大学教授 博士(教育学) 浜田博文                              |

## 論文の内容の要旨

### (目的)

1980年代以降のアメリカにおける中等教育段階の合衆国史カリキュラムの分析を通して、「新しい社会史」に基づく「多様性」「統一性」の両者を尊重した多文化的歴史カリキュラムの内容構成の原理を明らかにすることである。

### (対象と方法)

対象となるのはアメリカ合衆国の合衆国史カリキュラムである。文献研究により、アメリカの「新しい社会史」の成立過程を概観し、「新しい社会史」に基づいて作成された POSH およびニューヨーク州の合衆国史カリキュラムを分析する。こうした分析で導出された「多様性」と「統一性」について考察を加え、この両者を尊重した多文化的歴史カリキュラムの内容構成の原理を明らかにしていく。

### (結果)

「新しい社会史」に基づく多文化的歴史カリキュラムの内容構成の原理は、マイノリティをも含んだ「普通の人々」の「日常的行為」がスコープとなり、アメリカ文化の「多様性」とアメリカン・アイデンティティによる「統一性」との適切なバランスが図られているものである。

### (考察)

アメリカ合衆国は多民族国家であり、そのため多文化教育を展開する上での歴史教育の重要性が指摘されてきた。その歴史理論の一つが「新しい社会史」であり、それを学校教育での歴史カリキュラムに具現化されたのが POSH やニューヨーク州の合衆国史カリキュラムである。それらのカリキュラムでは、「普通の人々」が重視され、マイノリティの歴史的経験が探究される多文化的歴史カリキュラムである。そのカリキュラムは、マイノリティを含む「普通の人々」の「日常的行為」をスコープとすることで構成されている。さらに、多文化的歴史カリキュラムでは、「多様性」がすべてのアメリカ人の歴史的貢献によって統一的なアメリカ社会・国家を形成し、「統一性」がアメリカ民主主義や人権思想に基づいて「多様性」を保護するという、「多様性」と「統一性」との相補的關係としてアメリカ史をとらえることで、「多様性」と「統一性」の適切な

バランスが図られているのである。

## 審査の結果の要旨

本論文は、「新しい社会史」に基づいて「多様性」「統一性」の両者を尊重した多文化的歴史カリキュラムの内容構成の原理を明らかにすることを目的としている。アメリカでは、様々な人種をかかえ、それぞれの文化を背景として、どのように教育をするのが、特に歴史において大きな課題となっている。その一つの効果的な教育として、1980年代に「新しい社会史」に基づいた多文化的歴史カリキュラムが提唱された。本論文では、「新しい社会史」の成立をおい、それが多文化的歴史カリキュラムとして反映される経緯をふまえて、POSHといわれる歴史カリキュラムを分析した。その際の鍵概念が「多様性」と「統一性」であり、このカリキュラムはアメリカのナショナル・スタンダードにも継承されていく。さらには、ニューヨーク州のカリキュラムの基盤となり、多文化を推進する多大な影響力をもつカリキュラムとなっていく。そのカリキュラムを詳細に分析し、その内容構成の原理を明らかにしていくことは従来十分ではなかった。本論文は、多民族国家アメリカ合衆国が、歴史教育を通してどのように、アメリカという国、アメリカ人としてのアイデンティティを育成しようとしているのかを明らかにした意義のある論文と評価することができる。一方で、このようなアメリカ合衆国の歴史カリキュラムの研究が、日本の社会科・歴史カリキュラムにどのように貢献できるのが課題になる。審査委員会では、この点についてどのように著者は考えるのが質疑された。日本とアメリカでの「統一性」の概念の相違はあるにせよ、著者の建設的な応答が得られた。したがって、本論文は、独創的で社会科教育の研究に多大な貢献を与える研究と判断できる。

よって、著者は博士（教育学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。